３　研究のまとめ

(1)　成　果

〇日本の伝統的な美術作品を鑑賞する授業において、作品に折り目を付けて見ることや、他の作品との比較鑑賞を通して、考えたことや感じたことの根拠についてＶＴＳの考え方を基に対話活動を行わせたことで、屏風絵や障壁画の空間の表現や作品のよさについて考えを持つことにつながっていくことが分かりました。

(2)　課　題

〇ＶＴＳの考え方を基に対話活動を行った結果、生徒は作品から考えたことや感じたことについて根拠を発言することができました。しかし、更に対話活動の充実を図り、以下に示す生徒の発言が聞こえる鑑賞の授業を仕組む必要があると考えます。

・目指したい生徒の発言

本実践では、「なぜ、そう考えましたか」と問い掛けると、作品中に描かれている物のみを捉えて答えている場合が多く見られました。**図１**は期待される生徒の発言の変容を示しています。

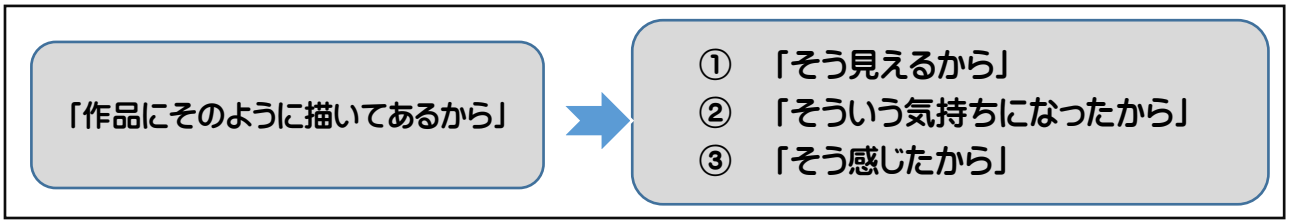

図１　期待される生徒の発言の変容

グループ内で問い掛けを行う中で「作品にそのように描いてあるから」という発言が①「そう見えるから」と自分自身の問題として、考え始めます。さらに、問い掛けを進めていく中で、②「そういう気持ちになったから」③「そう感じたから」と生徒が答え始めていきます。「なぜ、そう考えましたか」に答えるやり取りで自分のこととして考え、その考えの根拠を導けるようになっていきます。

今後、生徒が新しい日本美術作品に出会った際に、ＶＴＳの考え方を取り入れた対話活動を基にした鑑賞ができる生徒を期待します。造形的な見方・考え方を基に考えたことや感じたことは，生徒が作品のよさや表現様式の特質を見るために必要なことです。そのことを大切にしながら、鑑賞活動を繰り返し行っていけば、広げた場合、折り曲げた場合など、どのような見え方になるのかを想像し、見方や感じ方が深まることのできる鑑賞になると考えます。